



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4004 号 2017.11.7 発行

祝 4000 号達成記念の最後は 4004 号 いくつかの新たな取り組みの楽しみと摩擦をどうぞ

たんちょうボーロ 全国に羽ばたけ 釧路の障害者就労支援事業所 菓子コン決勝へ

北海道新聞 2017 年 11 月 07 日

「シッポファーレ！」が製造する「たんちょうボーロ」。タンチョウの顔は一つ一つ手書きだ



釧路市新川町の障害者就労支援事業所「シッポファーレ！」が、障害がある人による菓子や



パンづくりの全国コンテスト「第 8 回チャレンジドカップ」(実行委員会主催)の菓子部門で上位 8 チームの一つに選ばれ、12 月に横浜市で開かれる決勝大会に進出する。選考されたのは、難病や自閉症などを抱える 4 人が製造した焼き菓子「たんちょうボーロ」。決勝大会で製造過程を実演するメンバーは、大舞台への挑戦を「大きな励み」と喜んでいる。

同コンテスト菓子部門には、全国 31 団体が応募。予選では、レシピや出来上がりの写真で審査された。菓子部門で道内から決勝に残ったのは同事業所だけ。

「たんちょうボーロ」は、釧路産鶏卵と弟子屈産片栗粉などを使った生地を直径約 1 センチに丸め、食紅と食用竹炭でタンチョウの顔を描いた焼き菓子。製造はすべて手作業だ。昨年 3 月から、市内阿寒町の道の駅「阿寒丹頂の里」クレインズテラスで 1 袋 (36 粒入り) 260 円で販売している。

児童養護施設など団体から注文相次ぐ 厚労省の「新ビジョン」に

福祉新聞 2017 年 11 月 07 日 編集部

厚生労働省は 10 月 25 日、社会保障審議会児童部会社会的養育専門委員会 (委員長＝柏女霊峰・淑徳大教授) を開いた。前身の社会的養護専門委員会から 1 年 10 カ月ぶりの開催で、「新しい社会的養育ビジョン」などを踏まえ、12 月までに都道府県推進計画の見直し要領をまとめる。ただ関係団体による新ビジョンの評価は割れ、厚労省への注文も相次いだ。

推進計画は、都道府県や指定市などが、児童養護施設の小規模化など目標を定めるもの。国は2029年度までに施設、グループホーム、里親へ委託する子どもの割合を3分の1ずつにする方針。しかし現状は施設に偏り、自治体が16年に掲げた計画では、29年度の施設入所割合の予定は45%で、目標には及ばない。

厚労省の検討会が8月にまとめた新ビジョンは、就学前の施設入所を原則停止し、7年以内に里親委託率を75%以上に増やすとした。施設の滞在期間も乳幼児で数カ月以内、学童期以降で1年以内と短くし、施設には里親支援など機能転換を求めている。

委員会で、厚労省は新ビジョンなどを踏まえた推進計画の見直し要領を12月末までに提示する方針を示した。施設や家庭養護による児童数の見込みを検討。市町村の支援体制も整理するという。

これに対し、各関係団体が新ビジョンや今後の進め方についての見解を述べた。

【専門委員会で出た各団体の意見】

全国児童養護施設協議会	新ビジョンの方向性は理解するが、里親支援が不十分な中、目標値ありきの議論には反対。施設養護と家庭養護の協働が大切であり、専門性を持つ施設養育として積極的な位置付けを。
全国児童心理治療施設協議会	普通学校で問題視される子どもを受け入れており、新ビジョンにある小規模化はハードルが高い。児童養護施設と同じように考えないでほしい。
全国母子生活支援施設協議会	新ビジョンにあまり出てこない。親子入所施設の創設とあるが、我々は戦前から母子を受け入れており、そんな施設は不要。児童福祉法に位置付け、措置できるようにしてほしい。
全国乳児福祉協議会	現状としてアセスメントを担っており、家庭養護を補完する意味合いが強い。今後は乳幼児総合支援センターへの名称変更を。配置基準は現行の3対1から1対1にしてほしい。
全国里親会	里親制度の普及促進を定めた新ビジョンを大変評価しているが、年次計画は無理が生じないか心配。里親支援のフォスタリング機関は各地の里親会でも行いたい。
全国自立援助ホーム協議会	新ビジョンで我々にはあまり言及されていない。リビングケアアフターケアは、ノウハウがある。ぜひ生かしてほしい。
日本ファミリーホーム協議会	我々もほとんど触れられていない。家庭養育原則は当然賛成だが、年限を区切った工程については、現状からして容易ではない。ファミリーホームの養育者の厳格化を。

桑原教修・全国児童養護施設協議会長は新ビジョンについて一定の理解を示したが「里親への支援体制が不十分な中で、新規措置入所停止などの表現は踏み込みすぎ。行き場のない子どもを生み出す」と懸念。

「ビジョンに沿って自治体が短期間で推進計画を作れば、数字合わせになる」と、財源も含めた慎重な議論を求めた。

発達障害のある子どもを受け入れる平田美音・全国児童心理治療施設協議会長は「職員がチームで支えることが必要で、小規模化は難しい」とし、新ビジョンに否定的

な意見を表明した。

また、新ビジョンに盛り込まれた新たな親子入所施設について、菅田賢治・全国母子生活支援施設協議会長は「母子施設は母子をまるごと受け入れて、家庭養育を支援している」と強調。新施設は不要だとした。

一方で、森下宣明・全国乳児福祉協議会副会長は「現状として乳児院は家庭養護を支援し、補完する意味合いが強い」と新ビジョンに理解を示した。その上で配置基準を1対1にするよう求めた。

吉田菜穂子・全国里親会評議員は「里親の普及促進が盛り込まれた新ビジョンを大変評価している」と述べた。ただ年次計画については無理が生じるのではと指摘した。

最後に吉田学・厚労省子ども家庭局長は、新ビジョンに対する現場の不満の声を念頭に「現場を支えている方々の実践と思いを両方考えながら進めたい」と語り、施策化に

向け丁寧に議論する考えを示した。

ホームレスの人は、どのくらいいるの？

読売新聞 2017年11月7日

居場所様々に実態不明

ホームレスの人は
どのくらいいるの？

Q 夜、公園で寝ている人を見かけたの。段ボールやブルーシートを使っていたわ。

A 家がなくて、外で暮らしている「ホームレス」の人のことじゃないかな。2002年に制定されたホームレス自立支援法では、「公園や河川敷、道路、駅舎などで生活する人」と定義されているんだ。

ホームレスになってしまふ背景には、失業や病気で収入が低くなるなど様々な事情がある。生きづらさを抱えて人間関係をうまく築けず、家族や地域から孤立している人も多いんだ。

Q 何人くらいいるの。

A 厚生労働省の集計によると、今年1月時点で全国に計5534人いた。調査員が昼間、見て確認した人数なので、実態はもっと多いといわれる。東京や大阪などの都市部に集中しているよ。雇用環境の改善などで、03年調査の2万5296人と比べると大幅に減った。

でも、屋外だけでなく、24時間営業のネットカフェや飲食店などで過ごす「隠れホームレス」の存在も指摘されているんだ。

Q どうやって生活しているの。

A 同省が今年9月に公表した生活実態調査によると、半数以上が仕事をしていて、平均収入は月約3万8000円。廃品回収や、建設現場での日雇い労働で生活費を得ているそうだ。高齢化が進んでいて、平均年齢は61・5歳。初めて60歳を超えた。高齢になると、若者よりも社会復帰が難しく、健康状態も心配だね。

Q 自分の家で安心して暮らせるように、助けられないのかしら。

A 国や自治体が、一時的な宿泊場所の提供や、就労に向けた支援に取り組んでいるよ。民間団体による炊き出しや、巡回相談も熱心に行われているんだ。

Q うまく支援につながるといいんだけど。

A そうだね。支援が必要な人を様々な視点で見つけ出し、その人に合った形でねばり強くサポートしていくことが必要だね。(条文野)



女性や高齢者らに白羽の矢 農業の担い手創出目指し奈良県と近大がモデル事業

産経新聞 2017年11月7日

農業参入のハードルを下げることで、初心者や女性、高齢者などを新たに農業にマッチングしようと、県と近大農学部(奈良市)は、手間がかからず低コストでできる農法を提案する『『農の入口』モデル事業』を始めた。今後「なら近大農法」として確立し、マニユ

アル化して広めることで、県内各地で農の担い手の創出を目指すという。

県内では少子高齢化の影響で農業従事者の高齢化が進み、担い手不足が深刻な問題となっている。そこで、新たな担い手として白羽の矢が立ったのが、女性や高齢者、障害者だ。「きつい、汚い、危険」というこれまでの農業のイメージを脱却し、「快適、きれい、健康」という新たな「3K」への転換を模索する県は、9月に近大と協定を締結。年内には近大の農場で、新たな農法での作物の試験栽培を始める予定という。

なら近大農法は、低コストでできる「ユニバーサル農法（ローテク）」と、作業を自動化することで省力化した「ICT農法（ハイテク）」の二本柱で構成。ローテクでは、近大が発明した古着などの繊維でできた「ポリエステル媒地」を利用する。媒地を箱の中に敷くだけで栽培でき、土を全く使う必要がないため、土壌のよしあしなど場所を選ばない。素材が繊維のため軽量で、女性や高齢者でも持ち運びしやすい。媒地は半永久的に使えるのも特徴で、コスト低減につながるという。

県担当者は「奈良の土は重たいといわれ、根物の収穫は重労働。ポリエステル媒地なら、画期的に収穫作業が楽になる」と話す。

一方、ハイテクではICT（情報通信技術）を活用。機械が作物の生育データを分析し、肥料などの量を調節して自動で散布したり、食べ頃を判別したりする。個人の経験や勘に頼る必要がなく、初心者でも失敗する可能性が低い。

県の福谷健夫農林部長は、「奈良の農業は転換を図るときがきた。マニュアルを使って短期間で所得につながれば、担い手も増え、県内の耕作放棄地の解消にもつながる」と期待を込めた。

【荒金雅子の『多様性の未来』(4)】 女性を苦しめる3つの罠

産経新聞 2017年11月6日



ジャングルジム？！な女性のキャリア

女性のキャリアは男性に比べて複雑だ。結婚や出産・育児、配偶者の転勤、介護などのライフイベントに影響を受けたり、男性中心の組織の中で孤軍奮闘を強いられたり。

フェイスブックの女性COO（最高執行責任者）、シェリル・サンドバーグは、著書「リーン・イン」の中で、「女性のキャリアははしごではなくジャングルジムだ」と言った。後ろへ下がったり横に移動したり、落下しそうになったり。身動きできない状態に疲れ、登るのを諦めてしまう人も。さらに男性にはない、自分自身を苦しめる思考のわなが3つある。

1つ目は「先取り不安」。将来に対して漠然とした不安や恐れを持つこと。2つ目は自分でタイムリミットを決め「30歳までには」とか「子供ができるまで」と短いスパンでキャリアを考える「締め切り意識」。そして3つ目が「インポスター（詐欺師）症候群」。何かを達成しても、本当の自分はいたいしたことがないのだと、自分を過小評価してしまう心理状態を言う。

自分への信頼、自信を取り戻すにはまず、あるがままの自分と向き合ってみるとよい。欠点もあるけれど、良いところもある。未熟でも、精いっぱい頑張っていることを素直に認める。恐れや不安は一生無くならないけれど、そんな自分とつきあっていく覚悟を持つ。それだけですっきりした気分になれるだろう。

とらわれの心を捨てて、キャリアというジャングルジムを登っていこう。ともに励まし合う仲間がいればなおよし。

【プロフィール】荒金雅子（あらかね・まさこ） 昭和35年生まれ。ダイバーシティコンサルタントとして、女性の能力開発や組織開発のプログラムを提供している。株式会社「クオリア」代表取締役。

夏の賞与微増、36万6千円 中小企業が全体押し上げ 厚生労働省

産経新聞 2017年11月7日

厚生労働省が7日発表した平成29年夏季賞与の集計結果によると、1人当たりの平均賞与（従業員5人以上の事業所）は、昨夏に比べ0・4%増の36万6502円と、2年連続で増加した。人数が最も多い卸売・小売業は0・6%減少したが、次に多い製造業が0・2%増、人手不足が続く医療・福祉業では2・8%増と伸びた。

規模別に見ると、従業員100人以上の企業では昨夏比でマイナスになったが、30～99人の中小企業では3・6%増えた。厚労省は「中小企業の増額が全体を押し上げた」と分析している。

また、厚労省が同日発表した9月の毎月勤労統計調査（速報）によると、基本給や残業代などを合計した1人当たりの現金給与総額は前年同月比0・9%増の26万7427円で、2カ月連続で増加した。物価の影響を加味した実質賃金は0・1%減少した

汎用技術で社会変革、「超福祉」が崩す既成概念 土屋季之＝ライター

日経テクノロジー 2017年11月7日

“テクノロジーの民主化”が新たな福祉の形を生み出そうとしている。これまで福祉と言えば、当事者や福祉工学など“専門家”だけの世界だった。しかし、昨今、福祉を新たな主戦場としてメーカーや技術者が多数参入しているばかりでなく、より多くの人々が参画するようになってきた。

こうした「福祉×テクノロジー」という新潮流を体感できる場が、本日から渋谷区で開催される「超福祉展」（2017年11月7～13日）だ。「福祉そのものに対する“意識のバリア”を超える」ことを目指し、多角的に福祉にアプローチする超福祉展では、従来の福祉のあり方を超えた新しいテクノロジーやプロダクトが、渋谷という流行の発信地に数多く展示される。今回、超福祉展に登場する4つの出品品から、「超福祉」の世界をのぞいてみよう。



技術の前にまず“気持ち”

アンドハンドで開発中のデバイスの数々。手前側にある丸く半透明のものは「スマート・マタニティ」のデバイス。後ろ側は、白杖に装着するもの、耳付近に付けるものなど、さまざまな形状を検討している。超福祉展では、11月10日（金）15～16時にシンポジウムと体験会を開催するほか、16時からの「超実現ミーティング」にも参加する

それは歪が目立つようになった社会の一部分をさりげなくアジャストするもののように見える。「LINE Beacon」

とチャットボットを使ったサービス「&HAND（アンドハンド）」は、街中や電車内でちょっと困った状況に陥った障害者と、手助けしたいと思っている人をつなげるものだ。LINE Beaconは、街中に設置されたビーコン端末からの信号情報と連動して、LINEでユーザーとコミュニケーションができるサービスである。

LINE Beacon対応端末を持ったユーザーが、何か困難が発生した際にスイッチを入れると、LINEのチャットボットを通じて周囲にいる「サポーター」に協力を求められるというものだ。デバイスはキーホルダーや白杖へのアタッチメントなど、使用者に最適なものが選べることを想定している。具体的な使用例として、電車の事故などによるダイヤ乱れで車内アナウンスが流れる際に、ろう者が状況を把握できない場合がある。不安を感じたら

う者がデバイスを起動するとチャットボットが作動。近くのサポーターの LINE に通知が届き、サポーターは必要に応じて LINE メッセージで情報を提供する。

「アンドハンドを通して、手助けをする人の背中をそっと押し、最初の小さな成功体験をしてもらえれば」。プロジェクトチームでリーダー的役割を担当しているタキザワケイタ氏（ワークショップデザイナー、クリエイティブファシリテーター）はこう話す。アンドハンドのチームは、タキザワ氏の呼びかけで集まった 9 人のメンバーがコア。メンバー全員が企業に在籍しており、プロボノ（各分野の専門家が、自らの知識・スキルや経験を活かして社会貢献するボランティア活動）的にこのプロジェクトに関わっている格好だ。

「目的は技術開発ではなく、アンドハンドを社会インフラとして実装すること。だから、既にある程度普及していて、おばあちゃんでも若い子でも障害者でも、誰もが使いやすいサービスを選ぶ必要があった」（大手広告制作会社の久楽英範氏）



アンドハンド チームのメンバー。前列左から久楽氏、河津氏、今井氏。後列左からタキザワ氏、池之上氏、松尾佳菜子氏。（撮影協力：博報堂アイ・スタジオ）

アンドハンドのポイントは“気持ちオリエンテッド”な点にある。UX（ユーザー体験）デザインを担当する池之上智子氏（ビオトープ）は、「これは母へのプレゼントだ」と話す。「障害者を特別に意識してはいない。年を取った母や、なんらかの理由で外に出るのが億劫になってしまった

人たちが、気楽に外に出られるきっかけを作りたいかった」（池之上氏）

タキザワ氏は「スマートフォン（スマホ）によって生じた問題を、スマホによって解決しようとする取り組み」と指摘する。電車内でスマホに見入るばかりに生まれた、困っている人に気付かない状況を、スマホでまた解決できる可能性がある。アンドハンドの社会実装に向け、大日本印刷、東京メトロ、LINE と協力し、2017 年 12 月中旬に東京メトロ銀座線で「スマート・マタニティマーク」の実証実験を行う予定だ。

懸垂するおじいさん、実は… 千葉県がCM、狙いは？ 石平道典

朝日新聞 2017 年 11 月 6 日



県が制作した「介護のイメージアップCM」



介護の仕事の魅力を知ってもらおうと、千葉県は「イメージアップCM」を制作した。介護福祉施設を舞台に入所する高齢者と介護職員の若者のふれ合いを描く。「きつい」といった介護現場のマイナスイメージを変える狙いで、県ホームページなどで配信する。

CMは「懸垂編」「ダンス編」「カラオケ編」の3種類。それぞれ30秒で、懸垂編のみ15秒の

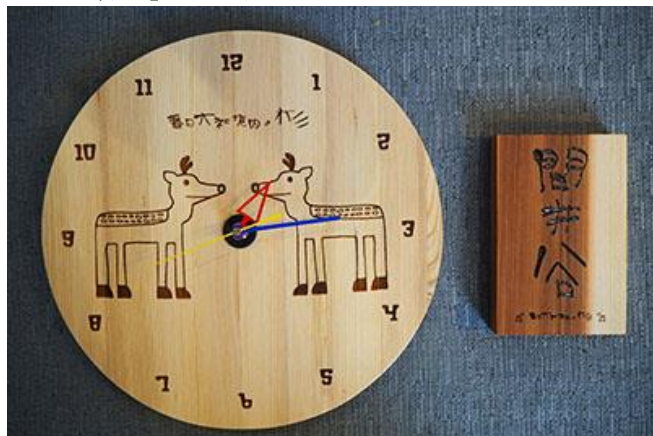


短縮バージョンもつくった。

懸垂編には、とある介護福祉施設で、張り切って懸垂をする入所者のおじいさんが登場。実は若い介護職員に肩車をされているのだが、おじいさんは「負けなぞ」と強がる――。

「ちょっと笑えて、あたたかい気持ちになれるCMを狙った」と県健康福祉指導課。CMは、11月11日の「介護の日」を中心とした1カ月間、県が行う「介護福祉のイメージアップキャンペーン」の一環で制作した。県のホームページや動画投稿サイト「ユーチューブ」で配信するほか、千葉テレビや映画館のCM、JR京葉線や総武線の電車内CMでも放映する。

奈良県) 障害のある人たちの新しい働き方 福祉施設のイメージを変える「Good Job! センター香芝」の試み



ニュース奈良の声 2017年11月6日
春日大社の杉を使った商品の開発から生まれた時計(左)と表札

「Good Job! センター香芝」の内部と、カフェで働くセンター利用者=2017年10月14日、香芝市下田西2丁目(撮影はいずれも川上文雄)

【提携企画「大学生による調査活動 市民メディアと授業をつなぐ」記事】

2016年7月、奈良県香芝市下田西2丁目にオープンした「Good Job! センター香芝(グッドジョブセンターかしば)」。身体、知的、精神、発達障害のある人たちが働いている。センターの業務は、障害のある人の個性豊かな表現(アート)と、それを生かしたいと考えるデザイナーや企業・団体をつなぎ、魅力的な商品を開発・製造することだ。運営母体は、奈良市六条西3丁目の社会福祉法人わたぼうしの会(運営施設としてほかに社会就労センターたんぼぼの家)。「福祉のアート化」「アートの社会化」など福祉とアートの新しいつながりを提案してきた。

春日大社(奈良市)の境内で安全上の理由から伐採される杉材を使った商品開発が進行中だ。障害者の就労支援団体「あたらしい・はたらく

を・つくる福祉型事業協同組合(あたつく組合)」(奈良市)も参画している。時計、表札、看板、名刺入れなどに伊藤樹里さんの書の作品と中村真由美さんのイラスト作品がデザイン化されて使われている。2人とも、たんぼぼの家のアートセンターHANA(はな)で創作活動をしている(作品はエイブル・アート・カンパニーのホームページで閲覧できる)。

「同じくアートにかかわりながら二つのセンターには違いがある」と「Good Job!」センター長の森下静香さんは言う。「HANAの場合、メンバー(HANAを利用する障害者)はアーティストとして作品をつくっていればいい。商品化・流通はスタッフがやってくれる。香芝では、デザイン化・商品化できるほど質の高いオリジナル作品を生み出せるアーティストは、今のところほとんどいない」。しかし、香芝のセンターを利用する障害者たちは、

ビジネスのいろいろな側面—商品づくり、在庫管理、流通・販売、情報発信—におのこの接点で仕事をしているとのこと。例えば、「国内外の約 70 の福祉施設や企業などで作られている、障害のある人が関わる商品約 1000 種類の入荷から出荷までの作業がある。

所得の再分配から可能性の再分配へ 福祉におけるビジネスの可能性

ウェブショップでの販売もセンターの業務の一つであり、香芝らしさが出ている。商品の写真を撮影し、それを編集・加工し、ウェブ上にアップする作業は、障害者が担う。時には商品を着てモデルになることもある。商品説明文の作成も障害者の仕事である。説明文の作成は、近隣の百貨店でのポップアップショップ（短期・期間限定の店舗）での接客にも生かされている。福祉施設での作業は単調な繰り返しの作業というイメージは、香芝のセンターには当てはまらないだろう。

香芝のメンバーの月収額が依然として低いという現実はある。全国平均からみて飛びぬけて高いとは言えない。とはいえ、福祉におけるビジネスは所得の視点だけでとらえることはできない。センターにとってビジネスは、障害者が福祉施設の外にある世界とつながり、人々との関係を広げ深めていくための絶好の手段でもある。それは「障害のある人が社会サービスを受ける存在にとどまるのではなく、個々の可能性を生かし、主体的な役割を果たすことができる仕組みを創出する」ことである。

これまで、障害のある人たちは「所得の再分配」政策の対象として、障害者年金や補助金など公的サービスを受けとる存在にとどまっていた。この現状を変えたい。以上のことをセンターでは「所得の再分配から可能性の再分配へ」という理念で表現している。

気持ちよく過ごせるたくさんの居場所 建物の設計に込められた思い

今年の 3 月、センターは奈良県建築士会主催の「奈良県景観デザイン賞」で建築賞と知事賞を獲得した。福祉分野にとどまらず建築分野の人たちも見学を訪れる全国注目の場である。

建物は篤志家が寄贈した土地の上に、北館（平屋、建築面積 220 平方メートル）と南館（2階建て、建築面積 311 平方メートル、延べ床面積 471 平方メートル）に分かれて立っている。近鉄下田駅と JR 香芝駅から徒歩でほぼ 5 分、目抜き通りに面した場所にある。最寄り駅から遠いという福祉施設にありがちなアクセス上の問題がない。

建物の入り口右手にはカフェの空間。近くの銀行で用事を済ませた帰りに立ち寄る人がいるという。カフェの窓ガラスを隔てて、建物の外部には長いベンチが置いてあって、休憩する人やコミュニティー・バスの利用者を待っている。

建物の設計を担当した大西麻貴さんと百田有希さんは「それぞれの人が気持ちよく過ごせるたくさんの居場所がある建築を造りたい」と考えたという。南館の内部を見ると、各部分を壁で完全に仕切って孤立させることのないようになっている。そのように、どの場所も「隠れている」と「見えている」が適度なバランスを保っていて、それで「気持ちよく過ごせる」のである。カフェに立ち寄った人なら、メンバーのつくったチョコレートケーキを紅茶でいただきながら、障害のある人たちとスタッフの働く様子、休憩する様子が見えることだろう。

建物の開放的なたたずまいから「交流と出会いの中で、新しい仕事をつくる」「障害者福祉施設のイメージを変える」という強い思いを感じとることができる。

以下は、奈良教育大学の教員志望学生（社会科教育専攻）のセンター訪問記である。

【訪問記】開かれた雰囲気の魅力 大学生が見たある日のセンター
奈良教育大学 3 年（社会科教育専攻）西山厚人

教員免許状を取得するために、大学のカリキュラムには介護等体験といって、社会福祉施設に 5 日間、特別支援学校に 2 日間、介助や交流を行うプログラムがある。私は昨年、これに参加した。高齢者施設での体験、それも利用者が楽しむ活動の手伝いだったので、障害のある人たちが働くという場面に出合わなかった。

障害者施設・作業所で 5 日間体験を行った友人の話では、「部品を組み立てるような作業を閉じこもってやっていた」ということだった。また、私の大学の生協では障害のある方々

が作られたパンなどが販売されていることもあるが、めったに働いておられる方との交流を見たことがない。このような体験から、私は障害のある方々が勤めていらっしゃる場合は、社会に対して閉鎖的であるというイメージを持っていた。多くの方が私と同じようなイメージを抱いているのではないかと思っていた。

センターを訪問したのは今年8月25日金曜日（午前10時30分～午後4時30分）であった。森下さんのご厚意により、作業の一部などさまざまなことを体験することができた。突然見学に訪れたのにもかかわらず親切に接していただき大変ありがたかった。

【午前10時30分】センター到着。北館、南館ともに外から中の様子が見える上、道路沿いで車も人もよく通るので、「開かれている」という印象が強かった。

【午前10時45分】カフェに電話があり、障害のある利用者の方が対応される。電話対応も任されているのだ、と少し驚いた。

【午前10時50分】森下さんと今年養護学校を卒業された利用者の方に南館を案内していただく（愛知県常滑市から見学に来られていた方に同行）。この利用者の方は緊張からか案内の声が小さくなったり、黙ってしまったりされていた。3Dプリンターやレーザーカッターなど、高度な機器がそろっていた。

無印良品に出品する物を生産されていると聞いて、販路をさらに拡大されているのだな、と思った。在庫管理、発送の準備など、仕事は多岐にわたるけど、いろいろなことをこなせる人の特性を生かされていて、「障害者は単純作業をするべき」といったような決め付けは良くないと思った。関連して、月曜日から金曜日まで曜日によって全く違う仕事をされている人もいると聞き、驚いた。

【午前11時20分】引き続き北館を案内していただく。皆さん集中されている。アトリエで働いている人たちを見て、スタッフなのか、障害のある人なのか区別がつかなかった。

【正午】カフェでホットドッグをいただく。丁寧に接客していただいた。センターのスタッフが障害のある人、2人に接客の仕方などを丁寧に指導されていた。センター全体が休憩に入って、落ち着いた雰囲気だった。

【午後1時】北館で張り子に塗る塗料を作る作業をさせていただく。張り子はカフェのホットドッグそっくりの形をした犬の張り子である。皆さん集中されていた。張り子を大量生産しなくてはならないようで、多くの人が作業に関わっていた。中には絵を描く人や、ミシンで帽子を作っている人もいた。1時間ごとに休憩があり、集中しすぎないように配慮がなされていた。「仕事が楽しい」という言葉が印象的だった。「また来てくださいね」と言われてうれしかった。

【午後4時】南館2階のショップを見る。色鮮やかな作品が多かった。午後4時に仕事を終えられ、カフェで皆さん雑談されていた。ショップのある2階からは1階の様子がよく見えて、開放的ですがすがしかった。

実際センターに行ってみて、「社会に開かれている」「落ち着ける空間」という印象を持った。センターは駅から近く、人通りも多い所に立地していて、外から障害のある方が生き生きと働いておられる様子が見られた。働いておられる方は仕事を楽しむことはもちろん、周りの人たちと関わることを楽しんでおられると思った。

また、落ち着ける雰囲気が魅力的であった。センターの建築が開放的な構造であること、障害のあるアーティストの絵画作品が多く壁に掛けられていることが大きな要因だと思う。さらに、センター長の森下さんをはじめ、スタッフの皆さんが私に対して気を遣い過ぎないというか、場に解け込ませていただいた。立ち寄っただけの人も、この落ち着いた、誰もが許されるような雰囲気に魅力を感じると思う。

